

うつほ物語の研究 : 琴・孝・君子の物語

余, 鴻燕

<https://hdl.handle.net/2324/4474909>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名	余 鴻燕				
論文名	うつほ物語の研究 ―琴・孝・君子の物語―				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	辛島	正雄
	副査	九州大学	教授	高山	倫明
	副査	九州大学	准教授	川平	敏文
	副査	九州大学	教授	静永	健

論文審査の結果の要旨

本論文は、物語文学史において、『源氏物語』に先立つ最初の長編物語として知られる『うつほ物語』を対象に、複雑な成立過程や錯綜した内容を持ち、洗練を欠いているようにさえ見える物語の大きな流れを、清原俊蔭を祖とする四代の人々の人物像を丹念に追跡することによって、そこで目指された物語世界がいかなるものであるかを浮き彫りにしようとした、意欲的な研究である。

始祖である俊蔭は、自身の乗る遣唐使船が難破し、見知らぬ国に漂着、遙か異郷を一人きりで20年余りさまよい続ける。その間に七弦琴の名器と秘曲を手に入れ、天人から一族繁栄についての予言を授かり、ようやく日本に帰国したが、故国の両親はすでに他界していた。喪に服した俊蔭は、朝廷に出仕する一方で結婚し、一女をもうける。天皇は、俊蔭の琴の卓越を知り、東宮の琴の師となるよう求めるが、俊蔭はそれを固辞、朝廷を退いて娘への琴の伝授に専念する。ほどなく俊蔭も世を去り、残された娘は寂しく暮らしていたが、大臣家の若君との一夜の契りにより一男をもうけた。母子の生活は困窮し、やむなく山中の大木の根もとに空いた「うつほ」の中で暮らすようになる。その間にも、琴は母から子へと伝授されたが、成人した若君＝藤原兼雅と再会したことから、生活の舞台は都へと戻り、男子は仲忠と名づけられ、物語の主人公となる。

仲忠は、親譲りの琴の名手であり、学問にも優れ、人々と対立することなく、朝廷の柱石として成長していく。このような仲忠の姿を、本論文では儒教における理想の「君子」像を体現したものと評する。その様な彼は、祖父俊蔭が挫折した朝廷への貢献を果たし、祖父の名誉を回復するが、ここからは、幼少時に目立った母への「孝子」としての造詣が、実は物語全体を貫くものであることも明らかになる。物語では、そのような仲忠の姿が、結果として父への「不孝」をもたらす忠こそや、容易には人に聞かせない俊蔭一族と違い、琴を積極的に披露する源涼、学問をもって権勢家に仕える藤原季英（藤英）の姿と対比的に描かれており、そのことで、彼らとは異なる仲忠の理想性が浮き彫りになると論じる。

以上のように、本論文は、『うつほ物語』が理想とする主人公像が、儒教において特別な楽器とされる琴を携え、父祖への孝養を尽くし、人材を公平に見抜く識見をもって天子に仕えようとする「君子」として描かれていることを、登場人物の対応関係や、『孝子伝』の受容、儒臣菅原道真との重ね合わせ等から検討することで、雑然と見える物語を貫く重厚な主題があることを、鮮やかに解き明かしている。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を有することを認めるものである。